

だから早く結婚して子をつくり、君の美（の証拠）を未来に残しなさい。そうすれば君の美も私の詩も生き続けることになる」と言っているのである。だが、この「君」というのが実はある名家の若い男である、という事実はシェイクスピア研究家の間ではすでに常識となっている。それが実際に誰なのかについては二説あるが。

それはともかく、自分の英語をクイーンズ・イングリッシュらしくするもうひとつのコツを伝授しよう。それは‘stiff upper-lip’である。これは文字通りには「堅い上唇」あるいは「堅い鼻の下」（upper-lip は上唇の粘膜の部分だけでなく、鼻と口の間の部分をも含む）という意味だが、転じて感情が顔に出ないイングランド人の性質を表すイディオムとして使われる。ここで言うのはイディオムの方ではなく文字通りの意味の方であり、実際アップパー・ミドル・クラス以上のイングランド人が英語を話すときには上唇と鼻の下があまり動かない。これを真似して上唇と鼻の下をあまり動かさずに発音すると、あるいはあまり口を大きく開けずにポソポソと呟くように発音すると、より「本物」らしい英語に聞こえるようだ。

## 2006年度より 仏検に準2級新設

経営学部

田川 光照

実用フランス語技能検定試験、通称「仏検」に  
来年度より準2級が新設されることになった。

2005年度まで、仏検の級分けは下から5級、4級、3級、2級、準1級、1級という6つの級に分けられてきたが、ここで問題だったのは、3級と2級との間でのギャップであった。仏検のパンフレットで、3級と2級について次のように説明されている。

3級：「基本的なフランス語を理解し、簡単なフランス語を聞き、話し、読み、書くことができる。学習200時間以上（大学の2年修了程度。一部高校生も対象となる）。」

2級：「日常生活や普通の職場で必要なフランス語を理解し、特に口頭で表現できる。学習400時間以上（4年制大学のフランス語専門課程4年程度で、読む力ばかりでなく、聞き、話し、ある程度書く力も要求される）。」

この説明からも分かるように、3級は、フランス語を専門的に学習するわけではない学生でも2年間まじめに勉強すれば合格可能であるのに対して、2級は、そのような学生にはとうてい手の届くものではない。実際、これまで本学名古屋校舎の学生で3級をとる人は時々いるが、2級をとった人はひとりもいない。名古屋校舎のカリキュラムでは「フランス語上級」が設けられているとはいえ、それを3年次と4年次の2年間受講したとしても、2級はまず無理である。

この3級と2級とのギャップは、仏検全体の出

願者数と合格率にもはっきりと現れており、たとえば2004年秋季の場合、3級の出願者は5,536人で合格者3,345人、合格率72.1%に対して、2級の出願者は3,654人で合格者906人、合格率29.1%であった。このようなぐあいであるので、3級と2級を橋渡しする準2級の開設が長らく待たれていたのであるが、ようやく来年度にそれが実現されることになったのである。これで、3級合格者は次の目標を目指しやすくなる。

では、準2級の試験内容はどのようなものになるのかというと、それは2級以上と同じように一次試験と2次試験からなる。一次試験は、筆記試験と書き取り・聞き取り試験からなり、試験時間は前者が75分、後者が30分、配点は筆記70点、書き取り12点、聞き取り18点で、2次試験は、5分間の面接試験で配点は30点である。これ以上詳しいことは残念ながら分からないが、ひとつだけ付け加えておくと、準2級は2級と3級の間ではあるが「3級寄り」だそうである。

以上のようなことから、現行カリキュラムおよび2006年度入学生から適用される新カリキュラムを前提に、名古屋校舎の学生が仏検を受験する場合の目安は次のようになるであろう。

1年次終了時点または2年次春学期終了時点で5級。ただし、2年次で「発展」を受講して一生懸命勉強すれば2年次春学期終了時点で4級。

2年次秋学期終了時点で4級。ただし、「発展」を受講して一生懸命勉強すれば3級も可能。

さらに「上級」を3年次、4年次と続けて受講した場合には、3年次春学期終了時点または秋学期終了時点で3級、4年次春学期終了時点または秋学期終了時点で準2級といったところであろう。

なお、たとえば5級から3級までは必ず数に関する問題が出題されるなど、問題の内容や形式が一定しているので、受験する場合は必ず過去問や対策本（図書館内メディアゾーンにある）で勉強していただきたい。また、4級以上に合格した場合には、語学教育研究室から検定奨励金として図書券が交付されるので、必ず同研究室に届け出てください。